

双塔



新潟教会 2014年8月

No. 315

主の平和

助任司祭 ナジ・エデルベルトウス

今はもう夏。市内以外に何処でも誰かが耳をすませなくても蝉の声が聞こえると思います。体に寄せて来るような蝉の声を聞くと有名な松尾芭蕉の俳句を思い出す人もいると思います。

2ヶ月前、ある友達に誘われて羽黒山と云う山に登りました。山の上に山伏達の祈りの場があって、その庭の中に大きな鐘や松尾様の御像もありました。それを見た時に彼の作った俳句をふと思い出しました。

「しづけさや いわにしみいる せみのこえ」

思い出したといっても俳句の意味がはっきりと解かるわけではありません。ただ山寺と彼の像が置かれてあるのを見て、彼の遊び心が俳句の中にあるのではないかと興味をもって考えました。蝉【漢字の中のある部分は単】と禅人の禅の類似があります。旅の途中で山伏達の宿を借りた彼は、感動や感謝の気持ちで彼らの祈る声を綺麗な俳句に残したのではないかと思います。「静かに休まる、私の体に禅の声【銅鑼の音】がしみてくる」。ようするに山寺に泊まった松尾様は、新たな精神力をも頂いて旅を続けられたと思います。

真夏であっても、祈りの雰囲気以身をおいたり、また短くても唱えたりすることは体にも心にもよいです。老人になったアブラハムとサラも、夏の暑さに負けることなく希望をして神様に信頼する望みを捧げ、よい行いに励んでいました。そうしている内に旅する人の姿で天の3人のお客様——その内の一人は主「アドナイ」と呼ぶ方——と出会いました(創18.3)。旅する3人を出迎えて、テントの中に招き入れると、2人は祝福の知らせを受けて、サラの絶望の笑いは大喜びに変えられました。本当に笑った【イサク】という子が2人に与えられた。

笑いと言えば、そろそろ大笑いを齎す西瓜割りの季節ですね。今月の夏まつりに西瓜割りに参加する子供が増えると思います。2人の子どもが休暇でインドネシアのジャカルタから母親と一緒に来ました。休暇といってもイエス様を忘れません。日本語の方がなじんでいるせいも、2人は日曜日のミサにも母親と一緒に与る事にしています。今まで隣の小学校に通いながら初聖体準備の勉強にも励んでいます。今月の平和旬間に初聖体を迎える予定です。

この3人の出会いや今年の夏の初聖体は神の業ではないかと思います。地上で旅する私達は何処の仮小屋で泊まってもイエス様の愛を忘れず、彼の御声をよりはっきり聞くように努力する事を思い出させる出会いだと思います。私達の避ける岩である(2サムエル22.3)神の言葉は霊と命である事を気づかせる出会いです(ヨハネ6.63)。

年配の方には、夏は怖いものかもしれませんが、果物の自然の甘みと蝉達の生きる環境は暑い夏にあります。夏の過ごし方に気をつけながら神の愛(マタイ6.26)を思い出す日曜学校の歌を口ずさんでいけばと思います。

子鳥達は小さくても お守りなさる神様。

私達は小さくても お恵みなさる神様。

歌の声は小さくても 喜びなさる神様。 (「こども聖歌集」38番)

蟬の声がうるさくても、お喜びなされる神様の平和が皆様の上にありますように。

■ 長岡教会宣教 100 周年 記念講演会 & ミサ

----- 7月5日(土) 10:00 ~ -----

あの晴佐久昌英師が長岡へ来られるとあって、会場のカトリック長岡教会(旧表町教会)の聖堂は140名ほどの人でいっぱい。なかには盲導犬を連れてきた方やプロテスタントの方もおられた。

東京・多摩教会主任司祭 晴佐久昌英神父様を招いての講演会に、新潟教会からも10人ほどが出席。テーマは『あなたに話したい』。冒頭で「私はこういう場所で話すのが好きです」と晴佐久師。「ホールで話すこともあるが、司祭としては、祭壇の前で話すのが一番ふさわしい。



なぜなら、『あなたに話したい』と思っておられる神様の言葉を取り次ぐのが司祭だから」。聖堂に神父様の声が響く。「恐れずに、心を開いてキリストを迎え入れてください」そして繰り返される。「みんなが救われています。それに気づかないだけです」思わず「私は、既に救われている」とばかりに、あちこちで肯く姿が。ランチタイムは2階の研修室で、各自で用意したお弁当を神父様と和気藹々と一緒に♪ ミサ後は、東京に急ぐ神父様を引き留め、

元気な笑顔がいっぱいの記念撮影が続いた。 ※かわいい～！天使のイラストは、晴佐久神父様が描いたもの。

■ 北三原殉教祭 ----- 7月13日(日) 11:00 ~ -----

昨年の山形県米沢市の北三原殉教祭は、梅雨の晴れ間の猛暑。今年は梅雨、真っ只中。ぬかるみで足元が悪いかにかかわらず、山形地区を中心に、信徒約100名が集い、福者ルイス甘粕右衛門と53名の殉教者顕彰ミサが、菊地司教様の司式で行われた。ミサ中の説教の中で、菊地司教様は「この地で生きていたキリスト者の勇気ある生き方以上に、周りの人達はキリシタンの生き方を、どのよう

に感じていたのかと想像する」「どうして妥協しないのか？キリスト教を表向きには捨て、隠れて信仰したらよいではないか。命を懸けてまで、なぜ信仰を守っているのか。どこかで妥協した方がよいではないか？と感じたのではないかと思う」と話され「私たちには、400年前のように体を焼かれ、命を奪われるような迫害の危機はないが、今でも、社会の中で信仰を守っていくことは厳しく、難しい状況にあると感じることがある」「一人一人が挑戦をしていく勇気を持つことが出来るように、信仰の先達である福者達の取り次ぎを祈りましょう」と結ばれた。昼食は米沢教会の皆さんが準備して下さった“名物牛肉弁当”をいただき、和やかな雰囲気の中に自由解散。幾度も手を振って別れ、帰路に着いた。(お疲れさまでした！)

《みんなの広場》



完成直後のルルドの洞窟
後ろ姿は三森神父様？

“ルルドの洞窟” が造られて、今年で 60 年！！

1854 年、教皇ピオ 9 世は、聖母マリアの「無原の御宿り」を教義としました。その 100 年後の教皇ピオ 12 世は、1954 年 12 月 8 日から 1 年間を「聖母の年」とし、特別免償として、聖母にさげられた大聖堂に巡礼する信者に全免償を与えると決めました。とはいえ、当時の日本では、海外渡航は特別な時代。ルルドまで行けなくても免償が得られるように…と、持ち上がったのが“ルルドの洞窟” 建設計画です。

しかし、建設には多額の費用が掛かります。

季刊誌『双塔』（1954 年発行）に、ルルド建設の頃の記事を見つけました！ 多くの人の協力と熱意が伝わってきます。

『 最初洞窟建設の計画が立てられ 20 万円という経費が公表された時、誰もが、それだけの金額を調べられるであろうかと危惧の念を抱いた。求めよ、さらば与えられん！それは物質的な求めであつたけれど、そこには一かけの利己心も物慾もなかった。（中略）建ち上ったものは小さく所詮人工の悲しさは自然岩のみごとさに比ぶべくもないが目に見えないキリストへの愛、聖母への愛はこの洞窟に満ち溢れている 』

ミサ時間のご案内

† 主日（日曜日）7 時・9 時半・12 時※・18 時

※第 1 日曜日は英語ミサ

† 週日（金曜以外）7 時

† 金曜日 10 時（第 1 金曜日 10 時・18 時）